パーソナリティ研究
2005　第13巻　第2号　269–271

ショートレポート

© 日本パーソナリティ心理学会 2005

携帯電話のメールによるコミュニケーションと高校生の友人関係における発達の特徴との関連

Mobile-phone Mail Communication and Characteristics of Friendship Development in High School Students

赤坂瑠以　Rui AKASAKA
お茶の水女子大学
Ochanomizu University

高木秀明　Hideaki TAKAGI
横浜国立大学
Yokohama National University

問　題

近年のパソコンや携帯電話を媒体としたCMC (Computer-Mediated-Communication) の急速な普及は，人間関係における新たな結びつきを可能にしたが，その反面，特に青年期における携帯電話メールの過度の使用が，発達に悪影響を及ぼす恐れが懸念されている．今日の携帯電話は多機能化し，メール及びインターネット接続機能が標準化されたことで，通話よりも手軽なメールを利用する若者が多数を占めている．そして，メールに熱中する若者は，対面コミュニケーションを行う機会や意欲が減少し，現実社会の他者との付き合いが希薄化したり，社会性の発達が妨げられるのではないかと考えられる．

人間関係を形成し，円滑に維持する能力を一側面に含む社会性（渡辺，1999）は，所属する様々な準拠集団との関わりの中で発達していくものであり，青年期にはとりわけ，友人関係を中心に発達する．従来，青年は友人との情緒的なつながりを求め，その相互交渉のうちに社会性が発達していく(Atwater, 1992) とされてきたが，現代青年の友人関係は，従来の青年像とは異なる特徴を持つとする研究が数多くあり，主に友人関係の希薄化が指摘されている（岡田，1995）．中でも，青年期中期にあたる高校生は，携帯電話メールの利用頻度が全ての世代の中で最も高い（文化庁文化部国語課，2002）にもかかわらず，高校生の友人関係と携帯メールの関連を検討した研究は少ない（小澤・福富，2003）．また，携帯メールの使用と友人関係の希薄化との関連はさかんに言及されているものの，その関連を実証的に明らかにした研究としては，大学生を対象とした辻・三上 (2001) の研究があるが，未だ多くはない．

そこで本研究では，高校生の友人関係を，青年自らが感じている友人との関わりの深さ，満足度，また満足，不満足の理由も含めた視点から類型化し，それぞれの類型で，携帯メールの使い方がどのように異なるかを検討することで，携帯メールの使用と友人関係の希薄化との関連を明らかにする．

方　法

調査時期と被調査者

2003年1月～2月に，関東圏内の高校5校と大検受験予備校2校で，520名（男子212名，女子308名，15～18歳）を対象に質問紙調査を行った．

調査内容

携帯電話メールの使用状況　①一日に送受信するメール数（「0通」から「50通以上」までの9肢択一），②メール相手の人数（自由記述），③即時性（受信メールに返信するまでの時間）（「1～4分以内」から「1日以上」までの9肢択一），④絵文字の使用頻度（「毎回たくさん使う」から「全く使わない」までの5件法），⑤カメラ機能の使用頻度（「ほぼ毎日使う」から「全く使わない」までの5件法），⑥メールの内容（事前の面接で挙げられた「情報伝達（用件を伝達すること）」，「真実の心理的一体感（本心を伝達すること）」，「虚構の心理的一体感（嘘を伝達すること）」，「情緒的依存（用件はなく暇つぶし）」に関する計12項目，「とても当てはまる」から「全く当てはまらない」の4件法）．

友人関係　まず友人を3つのグループ（①挨拶や軽いお喋り程度しかしない友人，②表面的な付き合いで，遊びに行ったりする友人，③本音を言い合い，けんかもできる友人）に分け，それぞれのグループへの満足度を4件法により求めた．次に上記の3グループのうち，どのグループが一番大切だと思うか，どのグループと一番多くメールをやり取りしているかについて回答を求めた．さらに友人関係に満足である理由と不満足である理由を自由記述で求めた．

結果と考察

友人関係の分類

友人関係を以下の基準に基づいて分類した (Table 1).

a) 友人の3グループのうち一番大切なのが，「挨拶や軽いお喋り程度しかしない友人」あるいは，「表面的な付き合いで遊びに行ったりする友人」であればこの両グループをまとめて「表面的付き合いの交友重視群」とし，「本音を言い合い，けんかもできる友人」であれば「本音の交友重視群」

Table 1 友人関係のカテゴリー

群	カテゴリー名	人数 (%)
A	表面的付き合いの交友重視・メール行為一致・満足群	21 (5.3)
B	本音の交友重視・メール行為一致・満足群	256 (64.8)
C	本音の交友重視・メール行為不一致・満足群	83 (21.0)
D	本音の交友重視・メール行為一致・不満足群	16 (4.1)
E	本音の交友重視・メール行為不一致・不満足群	19 (4.8)
合計		395 (100.0)

とした.（なお本研究では,「表面的付き合いの交友」を「友人関係の希薄化」とし,「本音の交友」を「友人関係の発達」と捉える.）b) 一番大切なグループへの満足度が「とても満足」と「少し満足」を「満足群」,「あまり満足でない」と「全く満足でない」を「不満足群」に分類した. c) 一番大切なグループと一番メールをやり取りしていれば「メール行為一致群」とし,そうでなければ「メール行為不一致群」とした.

以上の分類の基準を組み合わせ,人数が5人に満たない群を削除した結果,5群の組み合わせが作られた. A群[1)]は,表面的な交友を重視し,メール行為も一致しており,満足感を持っている群で5.3%であった. B群は,精神的に健康な行動を取っている群と考えられ,全体の64.8%と最も多かった. C群は,本音の交友を重視し,メール行為は一致していないが,友人関係に対して満足感を持っている群で,21.0%であった. D群[2)]は,交友の内容とメール行為と満足の程度に必ずしも整合が見られない群であり,4.1%と少なかった. E群は,本音の交友を求めているが,メール行為が一致せず不満足を感じている群で,4.8%であった.

またメールの内容についての因子分析（主因子法,プロマックス回転）を行い,固有値の減衰状況や因子の解釈可能性から4因子解を採用し,各因子に.40以上の負荷量を示さない2項目を分析から除外し,再度因子分析を行った. その結果,あらかじめ想定された「情報伝達」,「真実の心理的一体感」,「虚構の心理的一体感」,「情緒的依存」の4因子が抽出された (Table 2).

携帯電話メールの使用と友人関係との関連

メールの使用頻度 メールの使用頻度と友人関係との関連を検討するため,メールの使用頻度を低群（一日に0~9通,167名）,中群（一日に10~29通,157名）,高群（一日に30通以上,149名）に分類し,使用頻度3群と友人関係5群のクロス表を作成した (χ^2=17.21, df=8, p<.05). その結果,B群では,メールの使用頻度低群が有意に少なく（調整済み残差 =−2.8）,メールの使用頻度高群が有意に多い（調整済み残差 =2.5）結果となった. また,E群では,メールの使用頻度低群が有意に多く（調整済み残差 =3.1）,メールの使用頻度高群が有意に少ない（調整済み残差 =−2.6）結果となった. 前述のように,表面的な付き合いの交友を友人関係の希薄化とし,本音の交友を友人関係の発達と仮定すると,本研究の結果は,メールへの熱中と他者との付き合いの希薄化について「問題」で指摘した関係とは逆の関係を示しており,メールに熱中することで他者との付き合いが希薄化したり,友人関係の発達が妨げられるのではないかという通説は支持されないと言える. また辻・三上 (2001) では,密なつき合いを好む者ほど,メールの使用頻度が高いことが指摘されているが,本研究の結果からは,メールの使用頻度には,つき合いの深さだけでなく,相手への満足度の高さも関係している可能性が考えられる.

メールの内容 メールの内容と友人関係との関連を検討するため,友人関係と性別を2要因とする分散分析を行ったところ,「情緒的依存」に関する尺度得点で,友人関係と性別に有意な主効果が見られた (F(4,369)=3.37, p<.01, F(1,369)=22.04, p<.001). メール相手に情緒的に依存する傾向は男子より女子が高かった. この結果は一つには,高校生の友人関係の特徴として,女子は,友人と密着しベッタリした関係をもつ一方で,男子は,心理的に距離をとり,互いに分離した関係をもつ（長沼・落合,1998）とされており,こうした性差が,メールの内容にも影響を与えていると考えられる.

また友人関係では,A群より,B群とD群がそれぞれ有意に高く,C群より,B群とD群がそれぞれ有意に高かった. これは重視する友人関係の深さ,メール行為,友人関係への満足・不満足と情緒的依存との間には,単純な関連が見られないことを示唆している. A群は,表面的付き合いの友人を重視してメールを行い,そのような友人関係に満足感を持っており,情緒的依存が低かった. またC群は,本音の交友を重視しており,そのような友人関係に満足感を持っているが,本音の言える友人とのメール量は少なく,情緒的依存が低かった. 一方,本音の交友を重視してメールを行い,そのような友人関係に満足感を持っているB群と,本音の交友を重視してメールを行っているが,そのような友人関係に不満足なD群は,情緒的依存が高かった. これらのことから,表面的付き合いの友人とのメールのやり取りでは情緒的依存は低いが,本音の交友を重視して,それらの友人とメールを行うことで情緒的依存が高くなる可能性が考えられる.

さらに「情報伝達」に関する尺度得点で性別に有意な差が見られ,女子より男子が高かった (F(1,374)=9.87, p<.01)

1) この群の被調査者の理由として,「気が合うっていうのがいい」「友達がいっぱいいる気がして満足」「深い友達は怖い」などが挙げられていた.

2) この群の理由として,「本当の気持ちは分からないから」「自分も相手もいつも本音でいられるとは限らないから不安になる」などが挙げられていた.

Table 2　メールの内容の因子分析結果（主因子法，プロマックス回転）

	質問項目 a)	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4
		（情緒的依存）	（真実の心理的一体感）	（情報伝達）	（虚構の心理的一体感）
6	ちょっとしたことがあったとき，友達などにメールで聞いてもらうことがある．	**.71**	.14	.05	.11
2	もしメールが一日中，誰からも入らなかったら，さみしい感じがすると思う．	**.67**	.07	−.02	.18
8	私は，用があるときしかメールはしない．(R)	**−.49**	.21	.15	.23
12	私はメールで，自分の本心を伝えている．	.12	**.72**	.00	−.08
10	私は，友達や恋人からのメールには，いつも本音で答えている．	−.01	**.72**	−.03	−.05
5	メールでは長々と喋らずに，用件だけを的確に伝える．	.05	−.08	**.75**	−.09
4	メールのやり取りでは，情報伝達に関係ない絵文字や言葉は，なるべく使わない．	−.24	.05	**.55**	.06
9	メールは，自分の本心を見せなくてすむ．	−.16	−.07	−.09	**.66**
7	メールでは，嘘を付くことがある．	.28	−.15	.08	**.45**
11	メールでは，相手に賛同していなくても，相手に合わせて取り繕うことがある．	.11	.02	−.02	**.44**

因子間相関行列	因子 1	因子 2	因子 3
因子 2	.10		
因子 3	−.63	.05	
因子 4	−.14	−.42	.23

a) 一部略記　(R) 逆転項目　　回転前の累積因子寄与率　45.69%

ことも，友人関係の特徴における男女差を反映したものと考えられる．

「メール相手の人数」，「即時性」，「絵文字機能の使用頻度」，「カメラ機能の使用頻度」では，友人関係との間に有意な関連が見られなかったことから，これらの特徴は友人関係の深さや満足度とは関連しておらず，友人関係の希薄化と関連がないと考えられる．

関連の見られたものにおいても，通説で言われている友人関係の希薄化との関連を支持する方向ではなく，反対に，メール使用がさかんなほど，友人関係が密なものであることを示していた．これらの結果は，今後の研究でさらに検討される必要があるが，いずれにせよ，本研究の結果からは，メール使用と友人関係の希薄化との関連は確認されなかった．

引用文献

Atwater, E. 1992 *Adolescence*, 3rd ed. New Jersey: Prentice Hall.

文化庁文化部国語課（編）2002 平成 13 年度国語に関する世論調査　財務省印刷局.

長沼恭子・落合良行　1998　同性の友達とのつきあい方からみた青年期の友人関係　青年心理学研究，**10**, 35–47.

岡田　努　1995　現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察　教育心理学研究，**43**, 354–363.

小澤裕子・福富　護　2003　現代青年の友人関係 ── 携帯電話コミュニケーションが及ぼす影響　東京学芸大学紀要，**54**, 149–157.

辻　大介・三上俊治　2001　大学生における携帯メール利用と友人関係 ── 大学生アンケート調査の結果から　平成 13 年度（第 18 回）情報通信学会大会　個人研究発表配布資料.

渡辺弥生　1999　社会性　中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁桝算男・立花政夫・箱田裕司（編）心理学辞典　有斐閣　p. 365.

− 2004. 6. 4 受稿，2004. 8. 4 受理 −